

ハイパーモダンにおける「臨床知」試論

- 身体論と物語論に寄せて -

河村 俊之

日本大学大学院総合社会情報研究科

An Essay on the Clinical Wisdom in the Hypermodern Era

In Reference to the Theory of Body and Narratology

KAWAMURA Toshiyuki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In recent years, some science about clinical is being born or extended derived from the existing science. In this essay, the trend of some science about clinical is surveyed, and the historical background of this phenomenon is considered.

In hypermodern era, in order to solve distortion of the body and the heart, the clinical wisdom in which it adapts itself to common understanding is required. This is considered referring to the theory of body and narratology. It becomes a key to carry out the deconstruction of the internalized transcendent judgment, and to reconstruct it.

はじめに

近年、「臨床」(clinical)という語を冠した学問領域が、従来の臨床医学・臨床心理学の領域から拡張されるかたちで新たに生成している。臨床哲学、臨床人間学、臨床社会学などである。臨床という概念そのものが拡張されて用いられ、広く、現代における「生」の行く末が問われているかのようである。

臨床概念が生成・拡張されるにいたった現代の心象風景としては、「心の時代」、「癒しの時代」といわれるように、ストレスフルな社会の蔓延があげられよう。その意味では、臨床諸学の動向は、グローバルな市場競争や情報ネットワーク社会が実現し、ハイパーモダンな気ぜわしさが昂進した 1990 年代以降の時代状況に対する応答と見ることができるだろう。明るい未来が語られる一方で、不透明な暗いオプセッションが漂っているわけである。

一方で、臨床概念の拡張は、「言語論的転回」(linguistic turn)以降の現代思想(ポスト構造主義、社会構成主義など)が扱ってきたところの近代の振り返り、近代の存立機制を問う知の営みの影響を色濃く受けている(家族療法における物語論的転回など)。臨床諸学は多かれ少なかれ、これらの現代思潮の成果を意識していることから、考察にあたっては、近代以降のあり方を振り返るという視点も必要である。つまり、現代的応答であると同時に歴史性も背負っているわけである。

本稿では、まず、臨床概念が拡張されるにいたった経緯について、臨床諸学の動向を概観しながら記述する。次に、臨床的なフィールドの中心は、身体と心であることから、臨床諸学における共通理解的な概念上のフィールドとして、近代以降の「身体性」の変化、及び近代的な「心性」の存立機制を扱うことを提起する。そして以上を踏まえて、「身体性」と

「心性」の保全に向けた知としての「臨床知」のあり方について、一つの提起を試みたい。

臨床知への提起は様々にありうるが、本稿では「物語論」の観点からアプローチする。

またそれは、ポストモダンに色濃く漂う「反近代」の試みではなく、現実の様々なプレッシャーやオブセッションと向き合うなかで紡がれるものであるということ、現実へと再帰し続けながらの試みであることを初めに断らせていただきたい。

標題の「ハイパーモダン」には、社会学で言うところの近代以降の機能分化（たとえば労働における分業）の流れが、現代において急速かつ過剰（hyper）に昂進しているという意味をこめている。ギデンズ（1990）によれば、現代は「近代の徹底」という意味でのハイモダニティである。また、ルーマン（1992）は、近代社会は自己自身に準拠しており、そこから逃れる道はなく、機能分化以外の代替選択肢はないとしている。機能分化の昂進がもたらすものは、機能的な価値の高まりであり、機能的な尺度になじまない価値（冗長性）の縮減・効率化である。臨床的であるということは、ひとまずは、この過剰性と向き合うことであると考え、近代の延長としての現代を貫く基調を「ハイパーモダン」と表現した。

1 臨床知の動向

（1）臨床諸学におけるフィールド

臨床諸学の生成を見渡し、そこに共通理解的な知のありかたを考察したのが、中村雄二郎の『臨床の知とはなにか』（1992）である。

中村の「臨床の知」は、医学臨床のための知には限定されず、近代科学の方法に対する「代替知」として構想されている。そして、近代科学の三つの構成原理（普遍性、論理性、客観性）が無視し、排除してきた現実を捉え直す構成原理として、コスモロジー（宇宙論的な考え方）シンボリズム（象徴表現の立場）パフォーマンス（身体的行為の重視）を提唱する。また、情念や感覚を重視し、近代においては「視覚」が優位をしめてきたとして、「触覚」の回復を求める。そして、「臨床の知」として例示するのが、演劇的知（精神よりも身体という理性の方が包

括的である）、パトスの知（身体性の創造性に着目する）、南型の知（北部ヨーロッパの近代知に対する土着的な知を評価する）である。臨床の知は、諸感覚の協働に基づく共通感覚的な知であるとされる。^{（1）}

中村の着想は、「絵を描くのは精神ではなく、画家は身体を世界に貸すことによって世界を絵に変える。」^{（2）}としたメルロ・ポンティや、身体の多重性を論じた市川浩などの現象学的身体論と問題意識を共有している。^{（3）}

臨床諸学の多くは、フィールドやケースを重視する現場中心型の科学であるが、中村の構想は、これらのフィールドを横断する知のあり方を提唱するものであり、特に、人間存在を精神中心に還元するのではなく、情念・感覚・情愛などを備えた存在として扱い、身体を通じた他者との交流（間身体性）の回復を探るものであるといえよう。

次に、我が国における臨床諸学の動向を概観してみる。clinicの語義として bedside があてられるように、臨床とは、もともと基礎科学に対する応用科学としての、医学・看護学・心理学に付されたものであるが、ここからの拡張としては、筑波大学で、臨床医学系と社会医学系の連携分野として設定された「臨床人間学」がある。これは、死生学・医療人類学・医療社会学などの発展系として構想された分野であり、庄司進一（2003）によれば、出生前診断、無脳児、安楽死など生死のはざままで苦しむ事例を考察するものとなっている。^{（4）}

「臨床人間学」という名付けは多く、浜渦辰二が提唱する「臨床人間学」の構想としては、フッサールの現象学的心理学を俎上に乗せ、「ケアの人間学」と「ケアの現象学」の構築が予定されている。^{（5）}

哲学からの応答としては、「臨床哲学」があげられる。提唱者は鷲田清一で、研究拠点である大阪大学講座の Website によれば、「臨床（Klinikos）それは、ひとびとが苦しみ、横たわっているその場所をさします。いわば社会のベッド・サイドのことです」として、その場所で哲学に何が可能かを問うものが臨床哲学であるとされる。^{（6）} 定期刊行物『臨床哲学』の創刊号（1999）から vol. 5（2003）に収められた 46 編の論考及び報告を分類すると、うち 18 編が看護やケアリング、死生観に関わるものとなってい

る。なお、看護現場に学ぶということは、臨床諸学の試みにおける特色の一つとなっている。

また、フィールド横断的な学として生まれたものとして「臨床社会学」があげられる。源流の一つは1920年代にシカゴ学派社会学から派生した臨床社会学にあり、社会病理学と類縁性の強いものであったとされるが、再構築された臨床社会学は、幅広いフィールドを有する。我が国で近年刊行された主な基本書4点に収録された論文テーマを抽出・分類すると次のようになる。⁽⁷⁾

- (1) 医学・看護学・臨床心理学系(ホスピス、死生学、精神障害、心理療法など)
- (2) アイデンティティ論(存在証明、物語論など)
- (3) 社会病理・危機現象(いじめ、自己啓発セミナー、問題家族など)
- (4) コミュニティ研究(異文化論、災害と地域社会、セルフヘルプグループなど)
- (5) 政策科学化に向けた論考

社会学であるため、基本的手法として社会調査を掲げているが、科学知に還元されにくいテーマを数多く取り扱う点では人間学的な性格をも併せ持っている。ケースワーカーなどの人材育成をミッションに含むが、イタリアにおける「社会のオペレーター」、つまり、そのままでは断片化してしまいかねない社会生活要素(教育、福祉、協同組合など)をコーディネートするような役割の人材育成などにも言及されている。また、現場性を重視する臨床諸学の中では珍しく、政策科学を指向していることも特色であるといえよう。このため、臨床諸学でしばしば議論となる「現場性・個別性の重視か? 一般理論指向か?」という課題についても活発な展開が期待されよう。

臨床心理学及びカウンセリング学については紙幅の関係で概括を割愛させていただくが、「社会になじめるように回復させて社会に戻す」ことだけがミッションであるべきか否かについては議論がある。なお、臨床心理学の系統からは、スクールカウンセリングを扱う「臨床教育心理学」が生まれている。⁽⁸⁾

教育学からの応答としては、「臨床教育人間学」や臨床的アプローチを掲げる人間形成論などがあげられる。⁽⁹⁾ 我が国の教育学においては、イリイチの「脱

学校化社会論」や、ブルデューの「再生産論」などのインパクトもあり、教育制度を生んだところの近代の基底を分析しようとする研究の流れがある。つまり、教育制度を生んだのは近代であり、教育制度が近代を形成してきたという歴史性が問われている。

田中智志(2001)は、教育学における臨床知のありかたをめぐって、新たな臨床知指向とは「普遍性・同一性・自律性に対して個性性・他者性・応答性を重視することである」として、これまでの人間科学が「相手が代替不可能な個性性であること、了解不可能な他者性であること、応答のなかで生きていること」を無視してきたことを指摘し、「臨床知」が「方法知」に還元されることを戒めつつ、「危機に臨む」という臨床の意義を確認し、教育の臨床知は「クリティカルであるからこそクリニカルである臨床人間学に属する知でなければならないと思う」としている。⁽¹⁰⁾

(2) 領域横断的な臨床知の可能性

以上を概観したうえで、臨床諸学における共通理解になじむ知の方向性がありうるのかということを考えてみたい。臨床哲学が「社会のベッドサイド」を意識し、臨床社会学が社会の中での人間の苦しみを扱い、教育学系の臨床諸学が教育制度を含む近代諸制度の自明性を問うているとしても、それぞれにおいて、臨床概念そのものの定義については慎重に扱われている。

鷲田(1999)は「臨床哲学とはなにか、臨床という概念は哲学にとってどのような意味をもっているのか。そうした問いからはじめたい誘惑を感じるが、定義をめぐる議論で<臨床哲学>の問いを開始することはやめておきたい。定義はむしろ最後にくるのが、哲学には似つかわしい」としている。⁽¹¹⁾ また、田中(2004)は、学会紀要において「臨床教育人間学会は、『臨床』についての統一的な語義を定めていないし、これから定めないだろうが、私自身は『臨床』を、かけがえのない個体存在としての私が同じくかけがえのない個体存在としての他者に応答することである、と考えている」としている。⁽¹²⁾

臨床諸学の生成は、まだ始まったばかりであり、今後の学際的な営みのなかから、臨床概念の意義が

練られていくものと思われるが、臨床概念が、狭義の「現場性」を超えて領域横断的に拡張されてきた経緯をふまえると、仮に臨床概念の結晶化を急がないとしても、領域横断的ないくつかの志向性を提起することは可能であると考えられる。それは、臨床諸学が日々「苦しみ」や「痛み」と向き合っている以上、なんらかの回復や解放や保全に向けた知を紡いでいるはずだからであり、「苦しみ」や「痛み」の種類は様々であっても、また、「苦しみ」や「痛み」の構造を分析する手法は異なっているにしても、同じ事象に共通して向かい合っているはずだからである。

「領域横断的」な「臨床知」とは、ひとまずは「身体性」と「心性」が抱え込んだ「苦しみ」や「痛み」からの回復や解放や保全に向けた志向性を意味するはずであり、時間軸のフィールドとしては、近代以降の諸構造を扱うとすることで領域横断的な知を提起することが可能になると思われる。つまり、中村が設定したような対抗的な知のあり方を問う姿勢を重んじたいのである。

整理をすれば、領域横断的な臨床知の、□概念フィールドとしては、「身体性」と「心性」が共通理解的なアプローチになじむと考える。臨床が要請される背景とは、端的には身体と心の「ひずみ」であると思われるからである。

また、□時間軸においては、現代において突出してきた「ひずみ」があるとしても、「ひずみ」の多くは、やはり歴史的な生い立ちを有するものであり、そのことはポスト構造主義を始めとする現代思潮が取り組んできたことである。その意味で「身体性」と「心性」という概念フィールドには、積み重なってきた地層があるはずであり、考察の射程としては、近代以降の諸構造の存立機制や人間存在の扱われ方の歴史性が問われるべきであると思う。

2 身体と心をフォーマットする近代

(1) 昂進する密度と速度

ハイパーモダンなプレッシャーやオブセッションの多くは、前触れなく降臨したのではなく、歴史的な生い立ちをもっているはずである。この節では、身体との関わりのなかで、このことを概観してみる。

富永健一(1995)は、「近代化」という概念を4つの領域に区分した。近代とは、(1)技術と経済の近代化、(2)政治の近代化、(3)社会の近代化、(4)文化の近代化の4領域によって構成される変動過程である。4つの近代化は、相互に依存し影響を与えあってきたが、主要な牽引力は、技術と経済の近代化としての「産業化」である。そして、産業化は、情報処理革命を経ることによって、「より高度な産業化」(hyper-industrialization)の段階に移行したとした。⁽¹³⁾

ギデنز(1990)は、近代(モダニティ)のダイナミズムの源泉を三つの特徴として整理した。(1)時間と空間の分離(変動の速さと世界への拡散)、(2)脱埋め込みメカニズムの発達(ローカルな脈絡からの引き離し)、(3)知識の再帰的専有(知識は再帰的・循環的に生成し社会生活を伝統的な不変固定性から解放する)である。そして、現代を「モダニティの徹底化」として捉え、「われわれは、ポスト・モダニティという時代に突入しているのではなく、モダニティのもたらした帰結がこれまで以上に徹底化し、普遍化していく時代に移行しようとしている。」として、移行しつつある時代を「ハイ・モダニティ」と呼んでいる。⁽¹⁴⁾

また、アーレント(1958)は、人間の活動力を、労働(生存のための活動)、仕事(恒久材の製作)、活動(公的領域における言説活動)に分け、活動を上位価値としたうえで、近代とは、人間のあるべき条件が逆転した労働優位の社会であるとした。⁽¹⁵⁾

近代とは、ウェーバーによれば、社会全般の「合理化」の過程であり、その考察をさらに深めたルーマンによれば、機能的に分化していく自己運動の過程である。機能的分化の効用は、分化する前のユニットが含んでいた「全体性」の分解と「冗長性」の排除であり、プロセスが解体・圧縮されて、処理の密度と速度が昂進するということである。現代人は、この意味で、多くのことをなすのであるが、それは「全体性」や「冗長性」を失った代償としてである。もうひとつ言えることは、この自己運動に最も適応する領域は経済システムであり、それは経済活動が数量化になじむからであり、数量化になじむということが機能的分化をさらに促進するからであ

る。アーレントのいう労働の優位とは、裏返せば、経済システムが、他の領域（公共圏、市民社会、文化的な生活など）を押しつけて増殖してきた過程である。

（２）従順な身体

この自己運動は、「身体性」と「心性」のフィールドにおいて、どのように作用してきたのであろうか。

まず、近代を準備した「心性」は、ウェーバーの言うように、プロテスタンティズムの禁欲倫理が世俗化したところの、勤勉によって富を追求する精神であろうが、特徴的なことは、自己を監視する「超越審級」の内在化にある。すなわち、信徒たちは、自らを峻厳な神との直接的な関係におき、内在化した神に自己を監視させる心性を作り上げたのであった。その意味では、近代の自己運動とは、自己を監視する超越審級によって、密度と速度の向上を際限なく追求する心性の集合的・構造的な自己運動でもある。

近代的心性は自己を監視する超越審級の誕生によって生まれたが、自発的な心性だけではなく、身体の囲い込みを必要とした。

ウェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の末尾において、この様を描いた。

ピューリタンは「天職人たらんと欲した」が、我々は「天職人たらざるをえない」。なぜかと言えば、禁欲精神は、近代的経済秩序の「強力な秩序界」を作り上げ、この秩序界は圧倒的な力をもって「一切の諸個人」の「生活スタイル」を決定しているからである。「運命は不幸にもこの外衣を鋼鉄のように堅い檻」とし、「ついには逃れえない力を人間のうえに振るう」ようになった。そして営利活動は、倫理的な意味を取り去られ、「純粋な競争の感情」に結びつく傾向を示し、「スポーツの性格」さえ帯びることも稀ではない。そして、この行く末に、「精神のない専門人」と「心情のない享楽人」を見出す。⁽¹⁶⁾

身体を覆う「外衣」に関連して、フーコーの「従順な身体」という比喻について言及してみたい。これは『監視と処罰 - 監獄の誕生』（1975）において用いられた表現であるが、近世の軍隊・学校・工場において誕生した。軍隊は、縦列行進・担え銃・弾込

め・一斉射撃など身体リズムの基準を必要とするが、それは繰り返しの規律・訓練によって、体に刻み込むことが求められる。体操の原理と同じであり、条件反射に応じるレベルまで習得することが理想である。これは成功し、やがて、学校や工場にも規律と能率が浸透した。工場支配人は、頑健さ・迅速さ・熟練・粘り強さという身体能力の測定を目指すようになった。目指すところは、自然のリズムと、それに規定される体内時計のリズムに固執する農民的な身体を改造することにあった。

しかし、指図に基づく非自律的な主体をあてにしていたのでは能率はあがらない。指図がなければ身体は弛緩してしまうからである。

フーコーは、近代がこの課題を解決していった象徴を、ベンサムが考案したパノプティコン（中央に一望監視塔を備えた円筒形の監獄）に見出す。収容者は、常に監視されているという意識を埋め込まれ、監視人が実際にいなくても「見られている」という意識から、自律的に規則に従うことになる。この一望監視の原理を応用すれば、「受刑者に善行を、労働者に仕事を、生徒に熱心さを、病人に処方の厳守を強制しようとして暴力的手段に訴える必要はない」のであり、この発見は政治の次元での一種の「コロンプスの卵」であり、一般化される機能をもつとした。つまり、一望監視方式は「政治解剖学」における一般原理であるとフーコーは考えた。⁽¹⁷⁾

（３）「耐久する身体」と「演技する身体」

この原理にたったうえで、さらに能率をあげるためには労働プロセスの機能的分化が必要である。あるユニットを機能的に分化するための条件は、ユニット内のインプットからアウトプットまでの過程が可視化されることであり、具体的には数量化把握可能であることが必要である。工場労働はこうして成り立っている。

現代の労働において実現しつつあることは、「オフィスの工場化」である。かつては、職人において仕入れから出荷までの全体性が、個人の裁量に委ねられていたように、多かれ少なかれ作業とはユニットとして請け負うものであった。事務労働においては、個々人の作業プロセスの細部を管理することが困難

であったため、科学的管理を施こそうとしても実現は容易ではなかった。そのため経営学は、長い間、自発性を尊重する人間関係論学派の理論に席を譲らざるをえなかった。しかし、現代では、情報化の進歩によって、作業プロセスの数量化把握が容易になった。事務労働も、細分化・セグメント化して計量管理・プロセス管理が可能なものとなったのである。

「オフィスの工場化」は、新自由主義経済システムが本格化した 1980 年代のアメリカで開始された。その実態は、フレイザー、ショアなどによってレポートされている。⁽¹⁸⁾

産業改革と資金調達のために大幅な規制緩和が促進され、企業買収と株価依存経営が進んだため、経営者は、顧客・従業員よりも、株式市場の動向に敏感にならざるをえなくなった。資金調達のためには、業績もさることながら、正規従業員を 2 桁%単位で削減し、福利厚生もきりつめて、株式市場の要請にこたえ、なおかつ大幅な増収を実現する環境に迫られたのである。この結果、正規従業員の契約社員・派遣労働者への置換えが急速に進み、正規従業員は、生き残るためには、これまで以上の労働をこれまで以下の賃金で果たす条件を受け入れ、契約社員や派遣社員は「がんばれば正社員になれるかもしれない」という立場を見透かされて厳しい要求を受け入れていった。

作業プロセス全体が数量把握可能になると、分離・圧縮可能なプロセスは外部委託や非正規労働者に移されることになる。こうして、細分化された集密作業に従事する階層と、かつては同僚たちと分担していた複数の分離不可能なプロセスを寄せ集められて担当する「多能工」としての正規労働者への階層分化が可能となる。「多能工」といえば耳障りがいいかもしれないが、それは分業が止揚された状態ではなく、元来が相互に関連性が低かった異なる種類のメニューを集中して引き受けることを意味する。ある業務から異なる業務へのめまぐるしいギア・チェンジが要求されるようになる。また、技術者や研究員だけが使いこなせていた統計処理は、ソフトの普及とともに下方拡散し、正規従業員には小さなテクノクラートとしての能力が求められるようになる。

また、ネットワークの普及は大量かつ緻密なコミ

ュニケーションを可能にする。キメ細かい進捗管理や報告が義務となる。加えて、セキュリティソフトの向上は、送受信メールの検閲、アクセスファイルの特定などの情報漏洩対策といった当初の機能を越えて、サーバー側がパソコンに、離着席管理や進捗把握、督促する機能まで有するようになってきている。個々の従業員が、何時にどのシステムを使用して何を処理したか、また、その内容は「作業標準」と比べてどこまで効率的であったかの自動統計、個々の従業員がどのような資料を作成したかのタイピング再現も可能なのである。このようにキーボードを介して身体と接触するまでに進化した監視機能は、パノプティコン原理を超えた「ビッグ・ブラザー」と呼ぶにふさわしく、「監視される身体」への適応も要請される。職場にはプライバシーなど存在しないのである。

こうして可能になった雇用形態（いわゆる「柔軟な企業モデル」）は、従業員を、（１）長期蓄積能力活用型グループ（管理職・基幹職、雇用期間の定めなし・月給制または年俸制）（２）高度専門能力活用型グループ（企画・営業・研究開発等、有期雇用・年俸制）（３）雇用柔軟型グループ（一般職・技能・販売、有期雇用・時間給）の３つに区分することを可能にし要求する。⁽¹⁹⁾（１）だけが正規従業員であり、他は不安定雇用であるが、（１）にも 40 歳台での生き残り選別（死のキス）が準備されている。現代の経営は管理工学によって成り立っており、このスキルさえあれば加齢による経験の蓄積は、もはや必要条件とはならないからである。

フレイザーによれば、アメリカのオフィスは「ホワイトカラー搾取工場」と化し、「テクノロジーは仕事洪水をもたらす」、「なくなるゆとり、増えるストレス」、「（企業）年金の約束を反故にする」という状態となった。現代人には、「耐久する身体」が求められている。

身体に求められるのは以上の要請だけではない。感情社会学を開拓したホックシールド（1983）によれば、現代は感情が商品化される時代である。

ホックシールドは、個人は、誰も「演技」の手法で自分の外見を変える「感情管理」を行っているという。演技は、計算された演技としての「表層演技」、

自然な感情を訓練によって効果的に表現する「深層演技」に分かれる。後者は職業としては俳優に固有に求められるが、誰しも日常的に行っていることである。本来、私的生活に属するものであった表現は、売りさばかれるものとなった。⁽²⁰⁾

公的生活において「深層演技」を求められる端的な例が、航空機の客室乗務員である。乗務員は、「安全で家庭的な雰囲気」を演出しなければならない。日常から解放された乗客は、しばしば非理性的な存在となり、「不快な乗客」、「とんでもない乗客」と接するなかで、客への「恐れ」や「驚き」や「怒り」の感情が表出されないような感情抑制力、感情統制スキルを、神経・表情・身振りにおいて内在化しなければならない。これを互いに励ましあいながら「集合的な感情労働」として推進しつつ、人格的な「変異の達成」がめざされるとした。ホックシールドによれば、米国国勢調査で使われる12種職業分類のうち6分類に感情労働の要素が含まれているという。かつて私的なものであった感情表現が、「業務規定」によって定められる。この代償は「いつもの自己」であるという。現代においては、「演技する身体」までもが追加されるということなのだろう。

ハイパーモダンにおいては、ウェーバーの比喻をなぞれば、産業的身体がスポーツのように密度と速度を向上させることが要請されている。もっとも、しばらくの間は、冗長性が保たれる。つまり、人間にはストレス耐性やストレス対処能力（ストレス・コーピング）が備わっているの、ある程度の馴化が可能であり、親の世代が「今の時代にはついていけない」と嘆いても、子の世代はいつでも時代のスピードに適応し進化してきたのである。

しかし、仮に人類の身体をオリンピック・アスリートのような限界挑戦型に進化させることができたとしても、人間は産業アスリートとしてのみ生きられるわけではない。人間が身体的存在であるのは、情念や感性をもった存在であるからであり、これらは冗長性において発露する。健康な生物として生活するためには、冗長性の縮減には限界があるはずであり、冗長性が枯渇すれば、この「鉄の檻」から逃れられない以上、いつかは「臨界」が訪れる。グローバルな市場環境は「競争」の名のもとに、あらゆ

る異議申し立ての正当性を葬るのであって、身体を保全するためには、すたれつつある公共的な価値を意識的に再生させることが必要である。

ここで便宜的に、臨床知を、臨床社会学的な知と臨床人間学的な知に分類すると、前者に要請されるのは、□身体的耐久性の臨界点を明らかにすること、□人間の生活の歴史に照らして、譲り渡せない冗長性の内実を明らかにすること、そのために必要な□家職両立権や幸福追求権、公共活動権などの理念を現代的に鍛え上げること等々であろう。⁽²¹⁾

また、ハイパーモダンな労働に耐えていくためには、ひとまずは、労働の中に、義務達成の喜び、能力向上の喜び、仲間との協働の喜び等々を見出し、労働イデオロギーではないかという疑念を封印しながら日々過ごしていくほかはないのであれば、臨床的な労働論のようなものが求められてもよいかもしれない。少なくとも知識や技能が蓄積していくこと、なにかに卓越したいという願いは、どこかで生きる喜びにつながっているはずである。

（４）フォーマットされた心性

近代的な心性とは、自己を監視する「超越審級」の機能を内在化させたものである。この起源は、ウェーバーが読み解いたような内在化した神や、フーコーのパノプティコン原理であつたろうし、恥の文化を維持する「世間様」であつたろうけれども、近代的教育制度を通じて学習的に強化されてきたものである。現代のスピードに事故なく適応していくためには、さらに強化された「超越審級」が必要である。

心性を扱うことから、ここで、自己とは何かということをも簡単に素描してみる。経験的に知られていることは、モニターする自己とモニターされる自己が二重になっているということである。前者の機能がなければ、社会生活はおろか他者との交流に支障をきたしかねない。

認知心理学においては、「自己意識」は、長期記憶の中の「意味記憶」や「エピソード記憶」の結びつきのなかで形成されていると考えられているが、あわせて「自分が自分について考える」という二重性（自己意識の二重性）が存在すると理解されている。

このことは心理療法や社会学においても経験的に確かめられてきたことであり、フロイトは、自己の構造を、超自我（自我を監視するもの）と自我、さらには無意識層としてのイドの間に生起する葛藤として描き、G・H・ミードは、自己とは他者との関係において識別されるだけでなく、対自的關係でもあるとし、自己を「客我（me）」と「主我（I）」に分けた。客我とは、環境から学習した視点に基づいて自己を観察するものであり、主我とは、行為者であり、両者は対話しながら成立しているとした。また、ルーマンは、自己を「語る自分」と「語られる自分」の「自己言及」の關係が時間的に推移するなかで、変化しながら自己創出を続けていく心的システムとしてとらえた。

本稿で述べている「超越審級」とは、ミードの分類によるところの客我の中に埋め込まれたものであり、自然な二重性ではなく、歴史的なものである。そしてそれは、規範的な社会構造として共有される。

歴史的なものであるとするならば、それは自己にフォーマットされた言説として意識化・可視化することが可能である。このことは、言語論的転回以降の現代思潮が明らかにしてきたことである。

臨床的なまなざしは、自己モニター機能に埋め込まれた超越審級の歪みを問題にしてきた。心理療法の諸理論は、行動科学を除いては、「認知の歪み」や「意識のとらわれ」に注目し、苦しみは、歪みが自己内における対話を阻害していることに由来し、対話を通じて自己（主我）が、心情をさらけだしたときのカタルシス効果と覚醒を経て、自己認知が修正されることにより、正常さを「回復」するのだとしている。カウンセリング理論の基本である来談者中心療法は、クライアントへの傾聴を通じて、クライアントを受容し、この受容に促されて、クライアント自らが、呪縛ないし歪みの構造に気づき、自己回復力をとりもどす過程を経験科学としてまとめたものである。

自己の二重性と並ぶもうひとつの知見は、エリクソンが発見した「自我同一性」である。人間は、青年期危機を克服し、社会規範を自己了解的に受け入れることにより、自我同一性（エゴ・アイデンティティ）を獲得し力動的な安定を得る。ただし、自我

同一性は社会的な側面が強調されれば、社会への「存在証明」としての機能が肥大化する仕掛けになっている。他者評価に依存しなければ力動的安定を保てないようになれば、それは超越審級と化して自己を拘束しかねない。

現代において生き抜くためには、超越審級的なものを獲得することが宿命となっているが、ドゥルーズとガタリは『アンチ・オイディプス』の中で超自我の解体を提起した。⁽²²⁾ 続く『千のプラトー』において定住農耕社会（現代社会の比喩）と対峙する武装遊牧民（ノマド）や、中心を離脱しながら生き続ける蘭科植物の根（リゾーム）など、新しい生のイメージを提起している。

このような、「強度」に満ちた豊かな生を考えると、有力な解法である。ただ、身体は社会システムに拘束されており、そこからの移転は容易なことではない。現代においては、システムは周到に構成されており、拘束されたままの状態では超越審級を欠けば、社会との距離感が保てなくなり、道徳的過失や業務上の過失さえ問われかねない。精神的な武装は必要なのである。とはいえ、一度は超越審級に埋め込まれた装置を疑わないことには、機能的なものを追い求め、機能的なものに追いまわされる心性や、機能的なものに適応することが困難になった後に訪れる深い幻滅から自由であることはできないと思われる。超越審級は言説的に埋め込まれたものであり、自己でありながら固有の自己ではないのである。

新しい生のイメージを創造することは臨床知に期待される役割であろうが、さしあたっての臨床知として考えられることは、フォーマットされた超越審級の存立機制を一度は疑い、言説として埋め込まれたものを意識化・可視化することである。そして、このような脱構築を経て、自己了解的に再構築した超越審級を獲得していくことであると思う。脱構築以前の超越審級と再構築を経た超越審級の画期的変化は必ずしも脱構築の要件ではない。ひとたび組み換えた後であれば、それは自己のものであり、組み替えるという経験を経ることが次の変化（再帰的再構築）への出発点となる。

以上のべてきたことから、心性をめぐるの、臨床人間学的な意味での臨床知の役割は、（現実的なあ

り方としては) 超越審級を脱構築し再構築するための方法論を考えるということであると思う。ただし、そのための方法論が「信じられる」ということが前提である。次節では、このことを考察してみたい。

3 臨床知としての物語的変容

人間は言語によって生成される存在であるという「言語論的転回」の系譜に属する諸理論(言語学、構造主義人類学、ポスト構造主義、物語論、社会構成主義など)が、共通理解的に語ることは、人間における現実の解釈を通じて形成されるものであり、人間は言語を通じて社会的に構成される存在であるということである。

このことを、ネガティブに理解すれば、支配的な言説によって刷り込まれた超越審級からの自由を低く評価することになる。つまり人間が構造によって規定されるのであれば、自己の変容は困難であるか、首尾よく変容しえたとしても、ある支配的な言説から別の(例えば週刊誌やワイドショーを通じて流布される言説や、あまたの教祖やカリスマによって語られる教説などの出来合いの)新しい支配的な言説に移り移るだけの営みと理解されよう。

ポジティブに理解すれば、自らの生は自己了解的に再構築することが可能とする知見を導くものである。

ネガティブに理解するか、ポジティブに理解するかの分岐は、ひとえに、自己を物語的に構成する力を信じることができるか否かにかかっている。その力は、生理学的な意味でのエネルギーの存在としては解明できないかもしれないが、物語論において交差している諸理論をてがかりに探してみたい。

物語論(narratology)にはいくつかの系譜がある。ロシアの民話がいくつかの形態に還元できることを発見したプロップ(1928)の形態論、構造主義人類学における神話研究などの構造論、ポスト構造主義における支配的な言説の歴史的分析、社会学におけるライフヒストリー研究などである。

心理療法の分野では、クライアントが語り直すことの効果は以前から注目されてきたが、1980年代以降のアメリカにおいて、家族療法(個人に限定した

療法ではなく、家族をシステムととらえ認知の集団的変容を期待する療法)において「物語論的転回」と呼ばれる画期がおこっている。これは、家族が共有するところの社会から埋め込まれた「支配的な物語」(dominant story)を揺り動かすことによる自覚を期待するなど、人間がもつ物語生成能力に注目したものである。また、我が国の発達心理学や教育学の分野においても、物語的な自己変容の可能性が注目されている(山田、矢野、鷹野ほか)。⁽²³⁾近年の物語論では、生を語りなおすことの臨床的効用に注目することが一つの流れとなっており、本稿で扱う物語論は、主にこの流れによっている。

認知心理学者(発達心理学者、教育学者でもある)J・ブルーナー(1986)によれば、人間の認知作用には、互いに一方へと還元されず、かつ相補的な関係にある2つのモード(様式)がある。1つは、「論理・科学モード(paradigmatic mode)」であり、それは数学的な体系を実現しようとする。そこでは命題に対する解答はひとつしかない。もう1つは「物語的モード(narrative mode)」であり、物語は因果の関係を語りはするが解答はひとつではない。物語的モードはひとつの事態における多様な解釈の自由を許容する。⁽²⁴⁾

また、人間には物語に対する何らかのレディネスがあることは推定可能であるとしている。人間は子供の頃から事象を物語的に理解し解釈しながら世界を構築していく。物語は、通常性から逸脱したものさえも理解可能な形で説明しうるし、ストーリーは多様である。ここで重要なことは、出来合いの物語を摂取するだけではなく、自ら、意味の連関を発見し作り上げていく能力である。

ブルーナーの理論において、次に注目されることは、様相論理学(modal logic)における可能世界論(possible world)の導入である。⁽²⁵⁾世界は一つではなく様々な諸世界があり、それぞれの世界において真理があり、それぞれに異なる真理が立てられることは論理的に矛盾しないとする。ここからは豊かな着想が様々な導かれるけれども、肝要なことは、物語的な変容の可能性に一つの基底を提供しうることであり、それは硬直化した心性に解釈の自由を喚起する。

たとえば、ある苦難は、苦難そのものと解釈する必要はなく、新しい契機を用意するものであるかもしれないし、私はある世界においては惨憺たるありさまであるかもしれないが、ある世界では輝きうるかもしれないという生活知を裏付ける。事実の隠蔽や捏造を勧めているわけではない。危難の解決は、論理・科学モードで対応すればよいのであって、危難をどのように解釈するか、危難からどのような意味を導くかは、意味解釈と意味創出の問題であるだろう。

物語的な自己変容という考え方の効用は、変化を諦め、躊躇する心の背中を自ら押すことである。既存の超越審級を疑い、脱構築を経た再構築を試みるには、脱構築の不安に耐えられることが必要であり、痛みを伴うであろう心理的作業に耐えるためには、生成の可能性を信じられることが前提であるはずである。

物語的変容の前提が信じられるためには、いくつかの補強が必要であると思われるが、一つの補強材として考えられるのは、アイデンティティの複数性の擁護である。A・セン(2003)の喩えを引用すると「人は同時にいくつかのアイデンティティをもつことができる。例えば、ある人物は、イタリア人であり、女性であり、フェミニストであり、菜食主義者であり、小説家であり、財政的保守主義者であり、ジャズ・ファンであり、ロンドン市民である、という具合である。このように複数のアイデンティティを持てるということ、しかも複数のアイデンティティが多様な文脈に依存しつつ互いに関連しあっているということことは、明らかである」として、アイデンティティは自らが選択するものであるとしている。⁽²⁶⁾ もちろん、ある一つのテーマにめぐりあうことは幸福であり、そのテーマを究めるためには専心没頭が必要であろう。そのことを踏まえたうえでも、やはり存在の複数性が信じられていなければ、変容に向けて踏み出すことは困難なように思われる。存在証明(社会的アイデンティティ)を求めるオブセッションと向き合うことが待ち受けているからである。

おわりに

近年の臨床諸学の生成・拡張に敬意をはらいつつ、共通理解的なとまでは言わないものの領域横断的な志向性(臨床知)を抽出・素描できないものか、ということが本稿の課題であった。概念フィールドとしては、現代における「身体性」と「心性」の歴史性を振り返ることが必要であると思われた。機能分化する産業社会を生きぬかねばならないとしても、その歴史性と昂進する有り様を見つめないことには、領域横断的な視点は保ちがたいと考えたからである。

また、臨床知を臨床社会学的な知(身体を保全する理念の強化)と臨床人間学的な知(超越審級の脱構築と再構築)に分類したのは、便宜的な分類ではあるかもしれないが、前者は政策的な応答の知であり、時代の制約を受けざるをえないものであるのに対し、後者は歴史性を超え出でて長いスパンで考察されるべき問題であると思われたからである。その意味で物語論が提起することは、近々の学問的流行ではなくて、人類史的な課題の一つに取り組んでいる営みであると思われた。

物語論的な自己変容にはまだまだ補強が必要である。たとえば、生の多様性といっても、それは幼少期からの様々な感動の体験がなければ信じられるものではないだろうし、生きられた事例を間近に見聞したことがなければ実感できないものである。実感できないとすれば、消費的快楽の方がずっと早く時間をつぶせるし、魅力的に映るかもしれない。

そのためには、生きられた事例が数多く生成されていることが必要である。数多くというのは、物語メニューをカフェテリアのように揃えるということではない。そのような事例をいくら並べても、現代社会の中では、自伝パッケージのように「物語商品」と化し、消費されるだけであろう。成功物語や変身物語ではなく、苦しみを経て自己了解された物語こそが、リアリティをもって身体と心に語りかけてくると思われる。

最後に、物語の筋書は、仮に、他者モデルや出来合いの筋書の拝借から出発するとしても、予想を超える出来事や素晴らしい出逢いによって変容し、さらに光彩を放ちうるということ、それらの出逢いは個々人にしか体感できないがゆえに、個々の物語は

オリジナルでありうるということに希望を託し、結びとしたい。

【注】

- (1) 中村雄二郎 1992 『臨床の知とは何か』 岩波新書 112 - 140 頁
- (2) M・ボンティ 1966 『眼と精神』(滝浦静雄・木田元訳) みすず書房 257 頁
- (3) 市川浩(中村雄二郎編) 2001 『身体論集成』 岩波現代文庫 ほか
- (4) 庄司進一 2003 『生・老・病・死を考える 15 章—実践・臨床人間学入門』 朝日選書
- (5) 静岡大学大学院人文社会科学研究所・浜渦辰二研究室 Website
<http://anthropos.hss.shizuoka.ac.jp/shama/hamauzu.html>
- (6) 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学・倫理学研究室 Website <http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/>
- (7) 畠中宗一編 2000 『現代のエスプリ 393 臨床社会学の展開』 至文堂
大村英昭・野口裕二編 2000 『臨床社会学のすすめ』 有斐閣アルマ
野口裕二・大村英昭 編 2001 『臨床社会学の実践』 有斐閣選書
大村英昭編 2000 『臨床社会学を学ぶ人のために』 世界思想社
- (8) 倉戸ツギオ編 2001 『臨床教育心理学総論』 ナカニシヤ出版 ほか
- (9) 臨床教育人間学会(代表 高橋 勝、矢野智司、田中智志) ほか
- (10) 田中智志 2001 「教育の臨床知 - クリティカルな知のモード」(教育思想史学会『近代教育フォーラム』第 10 号 2001 所収) 158 頁
- (11) 鷲田清一 1999 『「聴く」ことの力』 TBS ブリタニカ 51 頁
- (12) 臨床教育人間学会 2004 『他者に臨む知 - 臨床教育人間学 1』 瀬織書房 3 頁
- (13) 富永健一 1996 『近代化の理論』 講談社学術文庫
- (14) A・ギデンズ 1993 『近代とはいかなる時代か?』(松尾精文・小幡正敏訳) 而立書房 187 頁
- (15) H・アレント 1994 『人間の条件』(志水速雄訳) ちくま学芸文庫

- (16) M・ヴェーバー 1989 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳) 岩波文庫 364 - 366 頁
- (17) M・フーコー 1977 『監獄の誕生 監視と処罰』(田村叔訳) 新潮社 210 頁
- (18) A・フレイザー 2003 『窒息するオフィス - 仕事に強迫されるアメリカ人』(森岡孝二監訳) 岩波書店
J・ショア 1993 『働きすぎのアメリカ人 予期せぬ余暇の減少』(森岡孝二他訳) 窓社 ほか
- (19) 日本経営者団体連盟 1995 『新時代の「日本的」経営』
- (20) A・R・ホックシールド 2000 『管理される心 - 感情が商品になるとき』(石川准、室伏亜希訳) 世界思想社 104 頁
- (21) 家職両立権はILO156 号条約に基づく。
- (22) G・ドゥルーズ、F・ガタリ 1986 『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症』(市倉宏祐訳) 河出書房新社 369 頁
及び G・ドゥルーズ、F・ガタリ 1994 『千のプラトール 資本主義と分裂症』(宇野邦一他訳) 河出書房新社
- (23) やまだようこ編 2000 『人生を物語る 生成のライフヒストリー』 ミネルヴァ書房
矢野智司 2000 『自己変容という物語 生成・贈与・教育』 金子書房
鷹野克己 1997 「物語・教育・抛り所 恫喝としての同一性」(教育思想史学会『近代教育フォーラム』第 6 号 1997 所収) など
- (24) J・ブルーナー 1998 『可能世界の心理』 みすず書房 18 頁
- (25) J・ブルーナー 1998 『可能世界の心理』 みすず書房 75 頁
- (26) A・セン 2003 『アイデンティティに先行する理性』(細見和志訳) 関西学院大学出版会 21 頁

【主要参考文献】

1. 福島章他編 1991 『臨床心理学体系 第15巻 臨床心理学の周辺』 金子書房
2. 中村雄二郎 2000 『中村雄二郎著作集 第2期□2 臨床の知』 岩波書店
3. 研究代表者 浜渦辰二 2002 『いのちのところに

- 関する現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的考察』平成 12・13 年度科学研究費補助金・基盤研究(2) 研究報告書
4. 日本臨床社会学会編 2000『カウンセリング・幻想と現実 上・下』現代書館
 5. 松下良平 2001「排除と再組み込み 教育学における『臨床知』発見の両義性」(教育思想史学会『近代教育フォーラム』第 10 号 2001 所収)
 6. 早川操 1999「ポストモダン時代における人間形成の展望と現代教育改革の問題」(『名古屋大学教育学部紀要』第 46 巻第 2 号 1999 年度 所収)
 7. 原聡介他編 1999『近代教育思想を読み直す』新曜社
 8. 増淵幸男、森田尚人編 2001『現代教育学の地平 - ポストモダニズムを超えて』南窓社
 9. 森重雄、田中智志 2003『＜近代教育＞の社会理論』勁草書房
 10. 鷺田清一 1998『悲鳴をあげる身体』PHP 新書
 11. 田中智志 編 1999『ペダゴジーの誕生 アメリカにおける教育の言説とテクノロジー』多賀出版
 12. 北野秋男 2003『アメリカ公教育思想形成の史的研究 - ボストンにおける公教育普及と教育統治 - 』風間書房
 13. 安藤英治 2003『マックス・ウェーバー』講談社学術文庫
 14. 富永健一 1990『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫
 15. A・ギデンズ 2001『暴走する世界 グローバリゼーションは何をどう変えるのか』(佐藤隆光訳)ダイヤモンド社
 16. R・ザフランスキー 2003『人間はどこまでグローバル化に耐えられるか』(山本尤訳)叢書・ユニベルシタス(法政大学出版局)
 17. N・ルーマン 2003『近代の観察』(馬場靖雄訳)叢書・ユニベルシタス
 18. N・ルーマン 2003『社会の法 1・2』(馬場靖雄他訳)叢書・ユニベルシタス
 19. N・ルーマン 1996『ルーマン、学問と自身を語る』(松戸行雄 編訳)新泉社
 20. 今村仁司 1981『労働のオントロジー』勁草書房
 21. 今村仁司 1988『仕事』弘文堂
 22. 今村仁司 1998『近代の労働観』岩波新書
 23. A・ゴルツ 1997『労働のメタモルフォーズ 働くことの意味を求めて - 経済的理性批判』(真下俊樹訳)緑風出版
 24. 越河六郎・星薫 2001『労働と生活の心理学』放送大学教育振興会
 - 25.『臨床心理学体系 第 3 巻 ライフサイクル』金子書房
 26. E・H・エリクソン 1977『幼年期と社会 1・2』(仁科弥生訳)みすず書房
 27. 若田恭二 2002『＜わたし＞という幻想、＜わたし＞という呪縛 精神病理学的政治学序説』三五館
 28. 石川准 1999『人はなぜ認められたいのか アイデンティティ依存の社会学』旬報社
 29. 座談会「ハイパーメディア社会における自己・視線・権力」(浅田彰・大澤真幸・柄谷行人・黒崎政男、電子マガジン版『Inter Communication No.12』1995 所収)
http://www.ntticc.or.jp/pub/ic_mag/ic012/zadan/summary_j.html
 30. 中野卓・桜井厚編 1995『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
 31. 田中智志・山名淳編著 2004『教育人間論のルーマン』人間は＜教育＞できるのか』勁草書房
 32. 浅野智彦 2001『自己への物語的接近 家族療法から社会学へ』勁草書房
 33. J・ブルーナー 1993『心を探して ブルーナー自伝』(田中一彦訳)みすず書房
 34. J・ブルーナー 1999『意味の復権 フォークサイコロロジーに向けて』(岡本夏木、仲渡一美、吉村啓子訳)ミネルヴァ書房
 35. 北山修・黒木俊秀編著 2004『語り・物語・精神療法』日本評論社
 36. 上野千鶴子編 2001『構築主義とは何か』勁草書房

(Received: January 10, 2006)

(Issued in internet Edition: January 31, 2006)